



LOHASふるじえくと ところなめ

～Lifestyles Of Health And Sustainability～

グループ名：循環

メンバー：相京政樹、加藤弘一、上内厚子、鈴木健司、谷孝司

現状の把握(課題認識)

常滑市

- 中部国際空港の開港により玄関口としての位置づけを持つ。
- 内陸部の公共交通網は海沿いにある鉄道に向けた路線バスのみとなっており、車社会前提の構造となっている。
- 開発余地が豊富であり、また農業への利用・農業からの転換も見込める。



2030年に向けての提言の概要

2030年には臨空エリアを中心とした発展を見せた常滑市において、利用客と住民が心身ともに豊かになることができる仕組みが構築されており、車主導の社会からの変換・地域にあったエネルギー利用とそこから生み出される雇用からLOHAS(Lifestyles Of Health And Sustainability)な生活が実現されることを目標とし、健康と環境のつながりに着目して『車を持たないまち』を中心とした『エネルギー』および『グリーンジョブ』の3点について提言する。



提案の内容

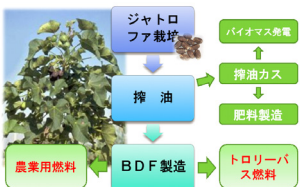
○車を持たないまち

- ・自動車から**新型ハイブリッドトロリーバス(電気、BDF利用)**へ
- ・プラグインハイブリッド車の**カーシェアリング**
- ・自動車から**自転車**へ



○エネルギーの地産地消 化石燃料からジャトロファ由来のBDFへ

- ・化石燃料から**ジャトロファ由来のBDF**へ



○グリーンジョブ

- ・雇用の創出と働く人の意識改革

提案実現のための具体的な取り組み(アクションプラン)と実現可能性

新型トロリーバス導入

- 既存インフラ(架線・道路)が利用できるため、他の新交通システム(路面電車等)よりも建設費が低廉
- ・想定利用客数: 約9,000人/月
- ・想定単価: 400円(1日乗り放題)
- ・運営費用、導入コスト: 約10,000千円/台

ツーリングロード整備

- 自転車で移動させることへ誘導し、環境にやさしく健康的なライフスタイルを定着させる

ジャトロファ栽培

- BDF製造⇒トロリーバス利用
 - ・想定BDF製造量: 約50,400~L/年
 - ・想定単価: 約100円/L
 - ・運営費用、導入コスト: 約100,000千円
- 新エネルギーの地産地消の農業および地域内物流による雇用の発生

波及効果

今回の提言が実現されれば、

- 先進事例のモデル地区として各手法の他への展開が期待できる。
(ハイブリッドトロリーバスによるCO₂削減・大気汚染低減、埋立地のエネルギー生産地への転換事例(ジャトロファ活用))
- 暮らす人がLOHASな生活を行い、地域の活気が向上していくことで心と体が豊かで健康になっていくことを期待できる。

住みやすい都市宣言(循環チーム)

- 現在走っている観光循環バスに加えて、架線電気とジャトロファから製造するBDFを燃料とするハイブリッド型の接続トロリーバス(鉄道)をニュータウンの足として導入し、街の顔にする。
- 空港・海辺のプロムナード・やきもの散歩道・駅を環状に結ぶサイクリングロード(とことろロード、仮称)を整備することにより、人を自転車・徒歩による移動へ誘導し、健康的なライフスタイルを定着させる。
- 油のなる木(ジャトロファ)を育て、BDFを製造・利用することにより、バイオエネルギーを地産地消するまちをつくる。